

# 平成29年度 第17回講演会 記録

日 時	平成30年1月13日(土) 13時～16時	
会 場	此花会館梅香殿	
講 師	(特活) イカオ・アコ常任理事 倉田 麻里 先生	
演 題	フィリピンにおける森里海連環学の実践	
備 考	参加者数 154 名 (会員 135 名、一般 19 名)	記録 藤原雄平

## はじめに

講演に先立ち、田中克先生から講師紹介

「倉田さんは竹内典之先生（京大フィールド研創設時の副センター長）の森林情報学を専攻され、修士課程修了とともに国際環境 NGO イカオ・アコの専門職員として、フィリピン・ネグロス島に赴任され、流域全体でマングローブの森を育てる体制づくりというフィリピン版“森は海の恋人”運動を実践してこられました。現在は2児の母、今も日本とフィリピン半々に活動を続けておられる」



## 講演要旨

- ・実家は三重県津市の田舎で農家。祖父が植樹した木を育て守るのが自分の役割との自覚から林業を学ぼうと京大農学部へ入学。人工林の育成と管理の専門家である竹内典之先生の下で「間伐の効果の検証」をテーマに間伐と年輪の関係などについて研究した。また、国際学生の家で多国籍の留学生との交流を通じて海外志向が芽生え、フィリピンで活動する NGO イカオ・アコに就職することになり、フィリピン・ネグロス島でのマングローブの植林などのプロジェクトに9年間にわたり従事した。
- ・フィリピンに赴任した2008年に、2,000本のマングローブの木を植樹したが2ヶ月で全滅してしまった。マングローブの知識がないことを再認識して勉強し、植樹のための場所・樹種・やり方などについて理解を深めた。植樹を成功させるためには、潮の干満のある場所、柔らかすぎず固すぎずの土壌、潮の流れの緩やかなことなどの条件がそろった環境などの条件が重要で、さらに40～50種あるマングローブの樹種から適切な樹種を選定することが必要。マヤプシギ、ヒルギダマシ、オオバヒルギの3樹種に絞り、環境に応じて植樹したことで成功し、今や大森林に育っている。結果として魚介類が増え、カキ養殖の利益にもつながった。
- ・さらに、森里海連環学の実践プロジェクト活動として、上流域の山地でも植林チームをつくり植樹を行った。薪炭材の調達により劣化した森林の再生、環境教育として学校の積極的参加を得るとともに、観光客を植樹活動に参加させるなどの取り組みを行った。また、上下流域の団体同士が交流することで、お互いの理解が進んだ。ゴミの減少、植林活動を手伝うリピーターの増加、海あるいは山に対する意識の変化、知識の向上などがプロジェクトの成果としてあげられる。
- ・今後のテーマは有機農業の拡大。上流域山地の植林チームが有機農業に取り組んでいて、普及拡大が期待できる。農薬の値段が高いため有機農業は経済効果も大きい。有機農業による野菜栽培の普及、サトウキビ一辺倒から多品種への切り替えを促進し、収入増につなげていきたい。

- ・9年間のフィリピン滞在を終えて、昨年より郷里の三重県津市で農家を継いでいる。農業の傍ら、農業体験型の民宿、特に外国人や都会の子供を対象にした民宿を営みたい。さらに今後も、フィリピンとの交流を絶やすことなく、日本とフィリピン・ネグロス島との懸け橋になる役割を果たしていきたい。

## Q&A

- Q1：海辺に住むおばあちゃんがはじめて山へ行って驚いたというお話しは、日本とは異なる生活環境ゆえと思うが、具体的にはどのようなことですか？
- A1：日本では考えられないことですが、海から山へ行くにはジプニーという乗合い自動車を利用する。片道50ペソ、日本円で120円ほどだが現地の人にとっては大金です。このおばあちゃんはマングローブの森の近くに住み、貝や魚を採りお金に換えているが、50ペソを稼ぐのは容易ではない。もう一つの要因は1980年代までは、ゲリラが山に潜み危険なため近づけなかった。NGOが山で活動を始めたのは治安が良くなった2000年代になってからです。
- Q2：ネグロス島の都市部はどのような様子ですか。
- A2：ネグロス島の州都はバコロド市で、フィリピンでも最も住みやすい町といわれ、開発が進んでいます。ネグロス島は約1/2がサトウキビ畑で、沖縄の風景に似ています。上空から見ると、サトウキビ畑の中に虫食い状態に住宅開発が進んでいるが、海外への出稼ぎで稼いだお金で購入したものです。現地は仕事がなく、家族の中のだれかが海外で働き、そのお金で家族が生活しているのが現状である。
- Q3：倉田先生が帰国後、現地の事業はうまく継続していますか？
- A3：帰国予定の3年前から、私が帰国していなくなっても事業が円滑に進むように必要なことを現地のスタッフに指導してきました。帰国後もインターネットなどを利用し指導してきましたが、そればかりではなく、現地のスタッフが自ら考え行動できる力を備える指導をしているところです。年に4～5回は現地へ行き、現地関係者との調整や技術指導を行っています。
- Q4：有機農業で野菜を栽培するというお話がありましたが、サトウキビの栽培とどのような関係になるのでしょうか？
- A4：サトウキビを有機農法で栽培することも行われていますが、サトウキビの収穫は年1回で、労働力が必要なのは一時期のみです。広大なサトウキビ畑の一部を野菜畑に変えることで収益が30倍になるといわれ、面積的に1/30を野菜畑にすることで年収を倍増させることが可能です。高価な化学肥料の使用を削減し、採算性を向上させようと考えています。
- Q5：この方法で庶民が経済的に豊かになるのでしょうか。
- A5：フィリピンの農地改革の結果、少ないながらも庶民が農地を持つことができるようになった。このような土地を有効に活用するため有機農業での野菜作りを指導しているところです。
- Q6：貧富の差はどのような現状ですか？
- A6：広い土地をもつ一部の富裕層と、海外へ出稼ぎしている家族からの送金に頼って暮らす人々が多くいます。山岳地帯に暮らす人々は、現金収入がすくなくとも、山に自生するバナナやココナツなどを食料にしていますし、ウリは種を撒いておけば放っておいても成長し食料になります。夫の家族は10人兄弟で、貧しかったのですが、豊かな自然のもと家族が協力し合い、いろいろ工夫をして生活してきたので、いまだんなことでも自分で出来る力をもっています。車の修理の仕方をそばから観ていて自分でできるようになりました。そのような力が日本の田舎暮らしで大いに発揮され、大変に役立っています。
- Q7：庶民の生活レベルは、かつて放映されたTVドラマ「おしん」の時代より少しましな程度とみていいですか。
- A7：そうですね。住民の50%くらいはそのレベルと思います。

Q 8 : イカオ・アコへの日本からの資金の支援が東北大震災以降少なくなったことを書かれています、最近の支援状況はいかがですか。

A 8 : 国際協力といいながら、日本に大きな災害が発生すると資金が国内支援に充てられ、フィリピンへの支援が少なくなることが続いていましたが、最近支援が元にもどりつつあります。フィリピンの良さと、支援の必要性をもっと強くアピールし、ボランティアとして多くの人にきてもらい、支援の輪が広がることを願っています。

### 田中先生コメント

本日倉田さんのお話しをお聞きし、日本とは異なる気候やゆるやかな時間の流れの中で現地の人々と交わり、このような土壌の中で倉田さんの人柄にもより、10年間でこれだけの大きなすばらしい成果をつくられた。森里海連環学というのは既存の研究者だけの細分化された学というようなものではなく、これが現地に根ざした森里海連環学だという一つのモデルをつくられたことに、私は涙が出るほど感動しました。まずはお礼を申し上げます。(拍手)

私は以前3年間ボルネオ島で暮らしたことがあります。マレーシアサバ州に50万人が暮らすコタギナバルという大きな町があり、その郊外には、フィリピンから島伝いに不法に移入してきた移民の人々が、マングローブ間に木を張り、カンバスで作った簡素な生活空間のなかで暮らしています。時折、取締りのためにそのような小屋は政府によって撤去されますが、橋の下などで一時的に雨をしのぎ、周りで取れる小魚やエビ類、バナナやココナツヤシなどで飢えをしのぎ、仲間にも支えられながら、なんの屈託もなく暮らしているのが印象的でした。私たちは幸福とは何かを学び直す必要があるのではないかと、今日のお話しを聞きながら改めて思いました。倉田さんのフィリピンでの10年の実績を踏まえ、ここから次の新たな出発が生まれることを大いに期待しています。

私の友人の山岡耕作さんは、黒潮源流域の人々の暮らしを探るべく、飛行機、船、車などの一切の交通の便のない場所をシーカヤックでめぐり、こういうところにこそ人としての幸せの原点があるのではないかをしらべました。そこで生活している人々は自給自足の暮らしですが、アンケートをとると95%が幸せだと答えます。家族みんなと一緒にらせるからだ。幸せとは何かを考えると、このような暮らし方を、今一度見直してみる価値があるのではないかと考えています。

### 最後に

夫君と赤ちゃん登壇し、麻里先生が紹介。

「夫はフィリピンで2年間プロジェクトに参加し、有機農法を広めることに尽力してくれた。現在農業会社で仕事している。これから夫と共に、日本とフィリピン両国で農業を通して貢献していきたい。

皆さんもぜひネグロス島へお出てください」 (拍手)

### 記録者コメント

講演会の感想を出席者に聞いたところ、「若い女性が単身異国で現地の人々とともに頑張り、10年で素晴らしい成果をあげ、大いに貢献されたことに感動した」。「ネグロス島が身近に感じられ、是非行きたいと思う」。このような感想を数人から聞きました。

倉田先生のように、現地の人々と生活を共にし、苦楽を分け合うことで国籍を超えた相互理解や親善ができてくる。そのよいモデルであると思います。

私たちは大阪から精一杯の応援をします。頑張れ クラタファミリー！

おわり